

【報告（査読なし）】

発達的气になる子どもをもつ親の育児ストレスへの支援

橋本 かほる^{*1}, 竹内 恵子^{*2}, 弓削 明子^{*1}, 名村 晶代^{*3}, 石塚 佳代^{*3}
堀田 佳代子^{*3}, 武田 眞由美^{*3}, 津田 明美^{*4}
^{*1} 京都先端科学大学 健康医療学部 言語聴覚学科, ^{*2} 福井大学 教育学部
^{*3} 福井市福祉保健部子育て支援課, ^{*4} 福井県こども療育センター

Support for Childcare Stressors of Parents with “Children of Concern”

Kahoru HASHIMOTO^{*1}, Keiko TAKEUCHI^{*2}, Akiko YUGE^{*1}, Akiyo NAMURA^{*3}
Kayo ISHIZUKA^{*3}, Kayoko HORITA^{*3}, Mayumi TAKEDA^{*3}, Akemi TSUDA^{*4}
^{*1} Department of Speech and Hearing Sciences and Disorders, Kyoto University of Advanced Science
^{*2} Faculty of Education, University of Fukui
^{*3} Child Rearing Support Division, Welfare and Health Department, Fukui City
^{*4} Fukui Prefectural Rehabilitation Center for Children with Disabilities

要 旨

発達的气になる子どもを担当する保育士に対して、親の育児ストレスをふまえた親理解や具体的な親支援についてアンケート調査を実施した。保育士がふだんの関わりで感じていた担当児の保護者の様子と育児ストレス結果との相違点について、子どもに関する育児ストレスの側面については保育士全体の87.5%がほぼ一致していたと回答した。一方で、親自身に関する育児ストレスの側面についてはほぼ一致していたと回答した者は25%であった。保護者支援に関しては、対象者の全員が親の育児ストレス調査は保護者理解および支援に有効であると回答した。母への直接的な対応については経験年数にかかわらず記述があった一方で、子どもの発達理解を含めた対応について記述しているものは経験年数が17年目以上の保育士であった。発達的气になる子どもをもつ保護者支援を行う際の保育士自身への支援として、育児ストレスの情報は有用であると考えた。

キーワード：発達的气になる子ども，育児ストレスへの支援，PSI，親子療育教室，
ソーシャルサポート

Key word: Children of Concern, Support for Childcare Stressors of Parents,
PSI: Parenting Stress Index, a nursery school implementing Parents-Children class, social support

I 研究背景・目的

親の育児支援へのソーシャルサポートとして、家族、両親、親せきなどのインフォーマルなもの他に、公的な機関として保育園の役割が重要視されている¹⁻³⁾。

福井市では、特別な配慮が必要な子どもへの支援を強化していくために2012年度より、障がい児健全育成事業として研究指定園による親子療育教室の研究を開始している。われわれは、在籍保育園における親子療育教室の有用性について、2012年から2014年までの教室に参加した保護者へのアンケート調査

を実施し、90%近くの親が教室参加をとおして、育児や子どもの見方に変化や気づきを持ち家庭での育児で実践できるようになっていたことを育児支援の視点から報告している^{4,5)}。わが子の発達になんらかの気になることがある時期から、子どもにかかわる親と保育士が教室という場で子どもの情報を共有し、親は保育士の育児支援をうまく利用しながら子どもへのかかわり方を知り日々の育児において実践ができていく⁶⁾。一方で、親の内面へのアセスメントは現場の保育士にとって課題とされており、具体的な保護者支援につながりにくい。つまり、親自身が家庭や職場でどのような悩みをもちながら育児をしているかがわからずして、気になる子どもの発達について保育士と親との共通理解は困難である。

そこで、発達の気になる子どもをもつ親の育児ストレスについて日本版PSI⁷⁾を用い、親のストレス状況を調査し、親自身の状況や子どもの発達プロフィールから検討を行い報告した⁸⁾。育児ストレスが高値であった親は全体の18%であった。子どもに関する下位尺度の項目数が親に関するものより多かったものは82%であった。特に「子どもの機嫌の悪さ」については63%の親が高いストレスを示し、その内容として目覚めの悪さや拒否反応が強いという子どもの行動特徴が示された⁸⁾。

今回は、フォーマルサポートの一機関となっている公立保育園において、発達の気になる子どもを担当する保育士に対して、親の育児ストレスをふまえた親理解や具体的な親支援について調査を実施したので報告する。

なお、本論文での「発達の気になる子ども」とは、福井県子ども家庭課の定義「中軽度障害もしくは重度障害児以外の児童であって、発達障害や知的障害などの疑いまたは環境や育て方に問題があると思われる児童で、特別な配慮が必要であると保育士等が判断する児童」⁹⁾を用いた。「気になる行動」とは「集団行動がとりにくい」「切り替えが悪い」「社会性の理解が乏しい」「言語の理解が乏しい」「発音が不明瞭」「視線が合わない」「運動発達が遅い」「多動である」など17項目があげられている⁹⁾。

Ⅱ 方 法

1. 対象

福井市では2009年度から、公立保育園で発達の気になる子どもを対象に親子参加型の療育教室（親子療育教室）を実施している。対象は2020年～2021年に親子療育教室（教室）のスタッフとして参加した保育士11名である。

2. 倫理的配慮

本研究は京都先端科学大学の研究倫理審査委員会の承認（正式審査20-9）を受けた。研究の実施にあたっては、研究の意義、目的と内容（調査方法）、データの扱いなどについて、対象者に説明文書と口頭で説明を行った。研究への参加決定は対象者の自由意思であり、参加の同意をしても研究実施中にいつでも撤回できることを説明した。

3. 方法と実施手順

1) 調査時期

発達の気になる子どもを担当する保育士への育児支援アンケート調査を年2回実施し、内容について分析した。教室の実施期間は例年5月から8月に隔週で実施しているが、調査期間は新型コロナウイルス感染症の影響により開催回数は半減した。1回目のpreアンケート（プレアンケート）は親子療育教室終了直後に実施した。保育士には親の育児ストレス調査（PSI）結果⁸⁾を研究責任者より説明し、保育士が気づいた点と具体的な育児支援計画について調査した。2回目のpostアンケート（ポストアンケート）は1回目実施時より3ヵ月から6ヵ月後の年度末に実施し、プレアンケートからの育児支援計画の取り組みについて調査した。

2) 調査用紙

プレアンケートでは、以下の4項目について調査をした。PSIの回答者（選択）、担当児の親の通常保育の中でのかかわりとPSI結果との一致や意外な項目（考えていたことと実際の結果のくい違い）を子どもの側面（意外な項目番号の選択と記述）と親の側面（意外な項目番号の選択と記述）、PSI結果を含めた保護者支援（記述）である。（資料1）

ポストアンケートでは、以下の3項目について調査をした。プレアンケート以降の保護者支援の内容（記述）、今後療育教室でPSIを実施していくことが親支援に有効かどうか（選択）、有効と回答した場合PSIの実施全般（実施時期、保護者へ結果を返す時期、面接者、結果の解釈など）について気づいた点（記述）である。（資料2）

Ⅳ 結 果

1. 対象者（保育士）の属性

アンケートの対象者（保育士）は11名（女性10名、男性1名）、年齢は20代3名、30代4名、40代2名、50代2名であった。保育士経験年数は1～5年3名、6～10年1名、11～15年2名、16～20年2名、26～30年2名、30年以上1名であった。11名のうち園長と主任のそれぞれ1名は2020年度と2021年度の2回のアンケートに回答している。療育

資料1 育児支援アンケート-pre 年 月 日.
先生のお名前: _____ 子どものお名前: _____ (歳児在籍)

1. PSIを回答したのは誰でしたか? 母親 父親 その他 ()
2. 先生がふだんの関わりで感じていた本児の保護者の様子と、今回のPSIの結果はどの程度一致していましたか?
2-1.子どもの側面について
() ほぼ一致していた
() 項目によって意外な項目があった
 ▶それはどの項目でしたか? (あてはまるものすべてを○で囲んでください)
 C1 C2 C3 C4 C5 C6 C7
 ▶特に意外に思った点について記述してください。
 []

2-2.親の側面
() ほぼ一致していた
() 項目によって意外な項目があった
 ▶それはどの項目でしたか? (あてはまるものすべてを○で囲んでください)
 P1 P2 P3 P4 P5 P6 P7 P8
 ▶特に意外に思った点について記述してください。
 []

3. 今年度の本児の保護者支援について、PSIの結果も含めどのようにしていきたいかと思えますか?具体的に記載してみてください。
[]

資料2 育児支援アンケート-post 年 月 日.
先生のお名前: _____ 子どものお名前: _____ (歳児在籍)

1. 本児の保護者に対する支援について、PSI結果を意識したところがあれば記載してください。
[]

2. 今後、親子療育教室で保護者にPSIを実施することが、先生方の保護者理解および支援に有効と考えますか?
①支援に有効だと考える⇒3に進む
②支援には有効とは思わない
③どちらとも言えない

3. PSIの利用について感想や意見をお書きください。
[]

教室実施園に異動前の療育研修歴は、同県の療育センターに2年間出向していたもの1名、同市の療育研修コース受講者3名、療育研修歴なし7名であった。また、前年度から継続して療育教室を経験している者は11名全員であった。(表1)

2. 対象者(保育士)の担当児の属性

療育教室に参加した子どもは11名あり、うち2名は双胎児である。子どもの平均年齢は46.5ヵ月(35~52ヵ月)、男児9名、女児2名であった。出生順位は第1子が5名、第2子が3名、第3子が2名、第5子が1名で、全てにきょうだいがあった。KIDS乳幼児発達スケールの総合発達指数の平均は87(65

~111)(±13.7)であった⁸⁾。(表2)

3. 対象者(保育士)の担当児の親の属性と育児ストレス結果

対象者(保育士)の担当する児の親10名の平均年齢は35.1(30~40)歳、全員が有職者であった。子どもの人数は2名から5名で中央値は2名であった。家族構成は核家族5名、拡大家族5名であった。育児支援者は有り7名、なし3名であった。妊娠中・出産時から退院までの経過について6名の親に何らかの記述があった⁸⁾。各親の属性と育児ストレス結果⁸⁾を表3に示す。

表1. 対象者(保育士)の属性と担当親子

No	性別	年代	経験年数	療育経験歴	療育教室 スタッフ経験歴	担当親子
保育士A	女	50代	35	なし	あり	親子H
保育士B	女	50代	27	市療育研修	あり	親子F
保育士C	女	40代	17	なし	あり	親子C, 親子G
保育士D	女	30代	9	市療育研修	あり	親子B, 親子E
保育士E	女	20代	2	なし	あり	親子A, 親子D
保育士F	女	40代	26	県療育センター	あり	親子E, 親子H
保育士G	女	30代	12	市療育研修	あり	親J子K
保育士H	女	20代	3	なし	あり	親子I
保育士I	男	20代	4	なし	あり	親子H, 親子J
保育士J	女	30代	11	なし	あり	親子I
保育士K	女	30代	17	なし	あり	親子H

表2. 対象者(保育士)の担当児の属性

対象者の 担当児	年齢	性別	出生順位	発達歴	基礎疾患	KIDS ^{※1} (総合発達指数)	親が気になる発達領域
子A	48	男	第3子	ことばの遅れ	なし	80	言語面, 行動面
子B	52	男	第1子	ことばの遅れ	なし	84	言語面, 行動面
子C	49	男	第5子	運動発達の遅れことばの遅れ	なし	65	言語面, 行動面社会性
子D	50	男	第1子	なし	なし	111	言語面, 行動面
子E	52	男	第1子	運動発達の遅れことばの遅れ	なし	93	行動面
子F	54	男	第1子	ことばの遅れ	なし	82	言語面, 行動面
子G	44	女	第2子	ことばの遅れ	なし	97	言語面, 運動面
子H	41	女	第1子	なし	なし	81	行動面
子I	35	男	第2子	なし	なし	75	言語面
子J ^{※2}	40	男	第2子	運動発達の遅れ	なし	105	運動面, 行動面
子K ^{※2}	40	男	第3子	運動発達の遅れ	なし	105	運動面

※1 KIDS:KIDS乳幼児発達スケール, ※2 子Jと子Kは双胎児

4. アンケートの結果

保育士 11 名に療育教室に参加した親の PSI の結果をフィードバックし、親の育児ストレスについてアンケート調査を 2 回実施した結果を示す。

1 回目のプレアンケート（資料 1）は、教室終了直後、発達の気になる子どもを担当する保育士に研究責任者がその子どもの親の PSI 結果をフィードバックした後に実施した結果である。2 回目のポストアンケート（資料 2）は 1 回目のアンケート実施から 3～6 ヶ月後の年度末に実施し、1 回目のアンケートで考えた支援方法についての取り組みについて調査した結果である。

(1) プレアンケートの結果

保育士 11 名より、教室で担当した子どもの親の PSI 結果について、16 件のアンケート結果が得られた。教室では保育士 1 名が複数の子どもを担当する

ため、アンケートの対象児は重複している。

1) 保育士が通常保育の関わりで感じていた担当児の親の感情と、PSI の結果について

①子どもの側面について

子どもの側面について、ほぼ一致していたと回答した者は 16 名中 14 名あり全体の 87.5%であった（図 1）。一方で意外な項目があったと回答した者は 16 名中 2 名あり全体の 12.5%であった。その内訳は C4 子どもの気が散りやすい/多動（保育士 C・親子 C）で記述はなし、C6 子どもに問題を感じる（保育士 I・親 T）でどういった点に問題を感じるのか気になる、と記述があった。

②親の側面

親の側面について、ほぼ一致していたと回答した者は 16 名中 4 名あり全体の 25%であった（図 2）。一方で意外な項目があったと回答した者は 16 名中

表 3. 保育士の担当児の親の属性と親のストレス総点、各側面のストレス値と 85%以上の下位尺度

対象者(親)	子の人数	家族構成	支援者	妊娠中・出産時から退院までの特記	PSI ストレス総点	子どもの側面 ストレス値 (%)と下位尺度		親の側面 ストレス値 (%)と下位尺度	
親 A	4	核家族	なし	有り(切迫早産等)	172	75	C3, C4	1	なし
親 B	3	拡大家族	有り	特になし	206	80	C2, C3	55	P7
親 C	5	核家族	なし	有り(帝王切開等)	278	99	C2, C3, C4, C5, C6, C7	99	P1, P2, P4, P5, P6, P7, P8
親 D	2	拡大家族	有り	特になし	170	50	C7	10	P7
親 E	2	核家族	有り	有り(帝王切開等)	158	40	C2	5	なし
親 F	2	核家族	なし	特になし	170	20	なし	30	P6, P8
親 G	2	拡大家族	有り	有り(帝王切開等)	159	40	C2	5	なし
親 H	2	核家族	有り	有り(帝王切開等)	234	65	C2, C5	95	P1, P2, P3, P5, P6, P8
親 I	2	拡大家族	有り	特になし	186	70	C3, C6	25	P8
親 J	3	拡大家族	有り	有り(切迫早産等)	189	50	C2, C5	40	P6
親 J	3	拡大家族	有り	有り(切迫早産等)	189	50	C2, C5	40	P6

子どもの側面の下位項目：C1 親を喜ばせる反応が少ない、C2 子どもの機嫌の悪さ、C3 子どもが期待どおりにいかない、C4 子どもの気が散りやすい/多動、C5 親につきまとう/人に慣れにくい、C6 子どもに問題を感じる、C7 刺激に敏感/ものに慣れにくい
親の側面の下位項目：P1 親役割によって生じる規制、P2 社会的孤立、P3 夫との関係、P4 親としての有能さ、P5 抑うつ・罪悪感、P6 退院後の気持ち、P7 子どもに愛着を感じにくい、P8 親の健康状態

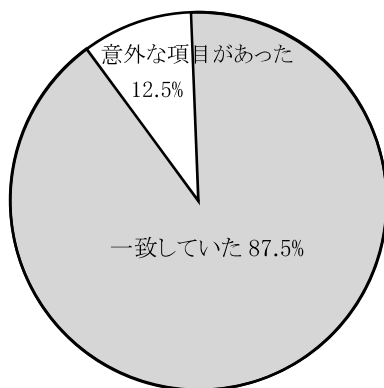


図 1. 子どもの側面に対する親の育児ストレス結果と通常保育での親の感情について

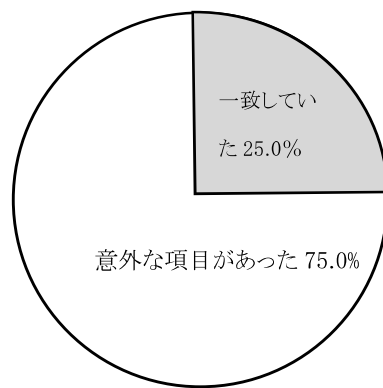


図 2. 親の側面に対する親の育児ストレス結果と通常保育での親の感情について

12名あり全体の75%であった。意外であった項目を複数回答している者は5名であった。意外な項目の内訳と回答数については、P1親役割によって生じる規制1名、P2社会的孤立3名、P3夫との関係3名、P4親としての有能さ1名、P5抑うつ・罪悪感4名、P6退院後の気持ち2名、P7子どもに愛着を感じにくい4名、P8親の健康状態3名であった。

意外に思った項目についての記述内容と保育士、担当親子を表4にまとめた。

2) 保護者支援についてPSIの結果も含めた今後の対応についての記述事項

PSIの結果より保護者支援で取り組んでいきたい点について、記述回答が7名より得られた。記述内容より、母への直接的な対応11件(a.母とのコミュニケーションを増やす6件、b.母への共感2件、c.子どもの良い面を伝える2件、d.対応を一緒に考える1件)、子どもの発達の理解を含めた対応5件(a.思いを受け止める2件、b.家庭での様子をよく聞く1件、c.園での対応を伝える1件、d.相談できる場の情報提供1件)、保育士自身の気づき4件、となった。(表5)

(2) ポストアンケートの結果

教室終了直後、保育士11名に対し療育教室に参加した親のPSIの結果をフィードバックし、半年後に担当児の保護者への支援についてのポストアンケートを実施したところ、10名から回答があった。

1) 今年度後半に行った本児の保護者に対する支援について

保護者支援についてPSI結果を意識したところに

ついて11名より記述回答があった。内容よりa.子どもの成長や園での姿を伝えた5件、b.保護者とのコミュニケーション場面や機会の工夫3件、c.母への共感3件、d.母の対応をほめた1件、e.気になる行動の原因の共有1件であった。(表6)

2) 親の育児ストレス調査と保護者支援への有効性について

今後PSIを実施することが、先生方の保護者理解および支援に有効と考えますか、という設問に対し11名から回答があり、支援に有効だと考えると回答したものは11名、全員であった。

3) PSIの今後の活用について

PSIを今後どのように利用するとよいと思いますか？(PSIをとる時期、保護者へ結果を返す時期、面接者、結果の解釈など具体的にお書きください)という設問について、以下の回答があった。

① PSIをとる時期や保護者へ結果を返す時期について

8名より記述回答があり、一定の期間をあけて結果を返す5件、直ぐに返す2件、どちらもいえない1件であった。記述内容を表7に示す。

② 面談者について

PSIの結果の親へのフィードバックは研究責任者が担当し、担任保育士が同席した。3名からの回答があり、1名は担任が同席する(コロナ禍で教室開催回数が少なくできるだけ担任が面談に入ると支援がしやすい。保育士B・親F)、2名は同席しない場合もあったほうがよい(担任が同席すると保護者支援に有効であるが、担任保育士が入ると本音を出せ

表4. 親の側面について意外な項目と記述内容

項目	記述内容
P2 社会的孤立	・お母さん自身が心を出せる場がないのだと思った。職場でも相談できる人がいないことがわかった(保育士F・親子H)。育児休暇もあけ仕事復帰もされて大分たっているが、社会的孤立を感じていたことが意外であり、子どもの側面についての育児ストレスが高く、困り感や態度にもあったので、母自身の育児ストレスに大きくかかわっているのかと思った(保育士A・親子H)。
P3 夫との関係	・夫との関係に育児ストレスが高い結果は、普段の母の様子や祖父母の様子から納得した(保育士I・親子J)。
P4 親としての有能さ	・親としての有能さでは、母自身の育児ストレスは低い点だが、子どもに関する育児ストレスが高いことから分かった(保育士B・親子F)。
P5 抑うつ・罪悪感	・子どもの好ましくない行動の際、母が自分自身を責めてしまうことがあるのだと気づいた(保育士D・親子E)。子が暴れたりすると自分がうまくできなかったように責任感を感じているところもわかった(保育士F・親子E)。
P6 退院後の気持ち	・母だけではなく、父も育児ストレスが高い点が意外だった(保育士G・親J子K)。
P7 子どもに愛着を感じにくい	・何人かの母が高くなっていたことが意外であった。(保育士A・親子H)。子をかawaiiと感じているが家でのかわわりが大変であることがわかった(保育士C・親子C)。
P8 親の健康状態	・親の健康状態でストレスが高いことが意外(保育士H・親子I)。

表5. 保護者支援について、PSIの結果も含めた今後の対応についての記述事項

項目	記述内容
母への直接的な対応 a. 母とのコミュニケーションを増やす b. 母への共感 c. 子どもの良い面を伝える d. 対応を一緒に考える	<p>a. できるだけ母に話しかけ気持ちを聞くことができるようになるとういと思う。母は自分の思いをなかなか話せない方のようなので少しでも話をしていこうと思う(保育士A・親子H)。保護者自身が精神疾患を持っている場合、アンケート項目の回答を踏まえて声掛けをするなど、保護者との距離を近くすることができると思う(保育士B・親子F)。母の精神状態やストレスを知ることができたので、母に合わせた寄り添い方や育児支援をしていきたい(保育士F・親子H)。</p> <p>a,b. 母は自身の育児ストレスが低いこと、一方で子どもへの育児ストレスがあるため、家での様子を聞いたり、母が話しやすい関係づくりをしたりしていきたい。本児の成長を共に喜び、子育てが少しでも楽しくなるように援助していきたい(保育士E・親子A)。</p> <p>a,c. 母がストレスを多く感じている上に、社会的孤立も感じていることが分かり、送迎時に本児の良いエピソードを多く話すとともに、母の負担にならないようコミュニケーションを図っていきたい(保育士C・親子C)。送迎は祖母がほとんどなので、連絡帳で子どもの様子をこまめに伝えていきたい。行事では本番だけではなくそれまでの取り組みでできていることを伝えていきたい。行事当日、保護者が参加した際には当日頑張ったことを伝えたい。懇談の機会や保育見学をとおして保護者が普段の子どもの様子を見る機会を設けたい(保育士E・親子D)。</p> <p>b. 母は困り感を保育士に発信しない方だが、実際は困っていることがわかった。母親を認めたり褒めたりし、保育士も悩みながら援助をしていることを伝え、母親の気持ちに共感しながら寄り添っていきたい(保育士D・親子E)。</p> <p>d. これまでも母親より子どもの相談を受けてきたが、母親の育児ストレスを知ることでは対応について一緒に考えていきたい(保育士D・親子B)。</p>
子どもの発達理解を含めた対応 a. 思いを受け止める b. 家庭での様子をよく聞く c. 園での対応を伝える d. 相談できる場の情報提供	<p>a. 懇談で子どもの機嫌の悪さや言うことを聞かないなどの困り感を話されていた保護者は子どもへのストレスが高値であった。発達の気になるお子さんの状態に合わせたかかわり方等について、日々の保護者との話を密にし、保護者の思いを受け止めていくことを続けた(保育士A・親子H)。お母さん自身が自分の心の中の悩みやかかえているストレスを表出する場や受けとめてもらえる場が少ないと感じたので、毎日できるだけお母さんに声かけし、話しやすい関係作りをめざしたいと感じた(保育士F・親子H)。</p> <p>b,c. 家庭での本児の様子やかかわりについてもっとくわしくきいてみること。母が夜勤の時の父との過ごし方の確認。園ではみられない、家庭での本児の切り替えがうまくいかないことや機嫌が悪くなった時のことばがけなど、保育園で上手くいっていることを共有していきたい(保育士C・親子G)。</p> <p>d. 子ども以外のことでは園に話しにくいところもあると思うが、声かけをとおして少しでも話しやすい関係や雰囲気を作れように長い目で見ていきたい。保健師等をはじめ地域で相談できる場の利用によって母が相談できる場ができるとよい(保育士K・親子H)。</p>
保育士自身の気づき	<p>・父母で気になる面や見ている面が違うことが分かった。その違いについて、知るきっかけになったと感じる(保育士G・親子J)。</p> <p>・両親の結果より父の気持ちを知るきっかけになったと感じる。子どもについて保護者自身の育児ストレスを客観的にみることができると、気になる点について保護者にたずねやすくてまた支援しやすいと思う。声かけをし、子どもが頑張っていることをほめていきたい(保育士I・親子J)。</p> <p>・親とさらにコミュニケーションをとっていききたいと思う(保育士H・親子I)。</p> <p>・子どもが期待どおりにいかないこと、子どもに問題を感じる項目の育児ストレス数値が高かったことを知り、園と家庭での子どもの少しの変化をお互いに伝えることで子ども理解を深めたい(保育士J・親子I)。</p>

表6. 今年度後半に行った本児の保護者に対する支援について

項目	記述内容
a. 子どもの成長や園での姿を伝えた	<p>・愛着を感じにくい保護者には子どものがんばっている姿を伝えるようにした(保育士F・親子H)。困り感だけではなく、本児の成長を細かく経過を追って伝えた(保育D・親子B)。家庭での様子や園での成長をこまめに伝えた(保育士E・親子A)。本児が頑張っていることを意識して伝えるようにした(保育士E・親子D)。プラス面のエピソードを母に伝えた(保育士C・親子C)。</p>
b. 保護者とのコミュニケーション場面や機会の工夫	<p>・社会的孤立にストレスがある母には声かけを多くした(保育士A・親子H)。送迎時にできるだけ声かけし、話しやすい雰囲気づくりをした(保育士F・親子E,H)。保護者よりコミュニケーションをとるように意識した(保育士H・親子I)。</p>
c. 母への共感	<p>・母からの発信や感情表出になるべく共感するようにした(保育士C・親子C)。母の育児ストレスが高かったことより、連絡帳に記述のあった気持ちに共感するようにした(保育士I・親子H)。保護者自身が育児に責任感を感じている場合は一緒に考えていく姿勢を心がけた(保育士F・親子H)。</p>
d. 母の対応をほめた	<p>・お迎えの際に子どもの機嫌が悪いときには母と一緒に対応し、母の子どもに対するよい対応をほめた(保育D・親子E)。</p>
e. 気になる行動の原因の共有	<p>・夕方にかけて機嫌が悪くなる原因を日中の活動やエピソードを送迎時や連絡帳で母に伝えるようにした(保育士C・親子G)。</p>

ない方もいる。保育士F・親E, H, 育児ストレスの高い親は、毎日顔を合わせる担任が面談に入ることでのどのように感じているのか心配。保育士D・親B, E)と記述があった。

③ PSIによる保護者の育児ストレス調査についての自由記述

親の育児ストレス調査について8名から記述があった。記述内容では保護者支援に関する内容6件、保護者理解に関するもの3件であった。(表8)

V 考 察

本研究は、公立保育園で実施している親子療育教室に参加した発達が気になるが専門機関への相談に至らない未診断の子どもをもつ親の育児ストレス結果をもとに、担任保育士の親支援への取り組みについてのアンケート調査である。今回の対象となった保育士は全員療育教室経験者であった。

1. 育児ストレス結果と保育士の通常保育での保護者の様子の一致

保育士がふだんの関わりで感じていた担当児の保護者の様子と今回のPSIの結果との相違点について

調査した結果、子どもの側面については、保育士全体の87.5%が親の育児ストレス項目と保育士が感じていた項目がほぼ一致していたと回答した。療育教室のスタッフは、対象となる子どものクラス担任で主に構成されている。そのため日常の保育活動の中で子どもの姿を観察し、発達や気になる行動について把握できていることで、親の育児ストレス項目との一致度が高いと考える。また、療育教室のスタッフとなった保育士は全員がこれまでに療育教室経験があり、さらに県の療育センターや市の療育研修経験のある者が11名中4名あったことも、子どもの発達や気になる行動についての知識や理解があったことも大きいのではないかと考える。

一方で親の側面については、意外な項目があったと回答した保育士が全体の75%あった。親の育児ストレスの項目で複数の保育士が意外であったとした項目は、P2社会的孤立、P3夫との関係、P5抑うつ・罪悪感、P6退院後の気持ち、P7子どもに愛着を感じにくい、P8親の健康状態であった。われわれの先行研究⁸⁾より、社会的孤立では職場への復帰、同じ職場内での配置転換、転職など、夫との関係で

表7. PSIをとる時期や保護者へ結果を返す時期について

項目	記述内容
一定の期間をあけて結果を返す	・結果のフィードバック時期は、教室終了後期間を開けた方が保護者は過去を振り返るのでよい(保育士A・親子H)。・保護者への結果のフィードバックは期間を空けてからの方がよい。結果のフィードバック時に家庭での様子、気になること、をあらためて聞けるのでよい(保育士A・親H)。PSIをとる時期は保護者が教室に慣れてきたころがよく、フィードバックは教室終了後一定の期間を経た方がよい(保育士A・親H)。結果を返す時期はある程度あいた方が親が落ち着いて冷静に聞くことができる(保育士F・親E, H)。・コロナ禍もあり、結果を返す時期は親との信頼関係がついた頃がよい(保育士C・親C, G)
結果をすぐ返す	・結果より緊急性が高い場合は日を開けずに面談を行った方がよい(保育士K・親子H)。その時に応じた対応ができるようにすぐに結果を返すことができるとよい(保育士J・親I)
どちらともいえない	・結果のフィードバックは時間がたつと保護者とその時の子育て状況のことを忘れるが、一方で期間をおいてからの方が話せることもあるため、保護者へのフィードバックの時期はどちらともいえない(保育士A・親H)。

表8. PSIによる保護者の育児ストレス調査についての自由記述

保護者支援	・結果の解釈を理解することで、保護者のお子さんへの思いや家庭でのストレス度など知ることができた。保護者への話の内容や話し方を考える上で参考にできた(保育士A・親子H)。家庭の状況や子どもに対する悩みを聞ききっかけになり、保護者支援の充実につながっていくと感じた(保育士E・親A, D)。PSIの結果より保護者の気になっていることが具体的にわかりやすくなり、家庭の状況や様子、子どもに対する悩みを聞く手掛かりになることが保護者支援の充実につながっていくと感じた(保育士E・親A, D)。PSIの結果の理解は、今後の保護者とのかかわりの1つの目安になり有効だと思う(保育士D・親B, E)。PSIの利用により、保護者の困り感がわかり保護者理解や支援がしやすいと思った(保育士H・親I)。保護者支援に有効性であるため、教室不参加の保護者にも実施してみたい(保育士I・親H, J)。
保護者理解	・一人ひとりの結果を詳細に知ることができ、保護者理解になった(保育士F・親E, H)。保護者が感じている育児ストレスから、子どもへのかかわり、家での様子、気がかり感などさまざまどころまで考えを広げることができた(保育士C/親C, G)。

は夫の単身赴任、出張の多さによる家庭での共有する時間の少なさ、抑うつ・罪悪感、子どもに愛着を感じにくいについては、子どもの行動面（問題行動や多動、親への反応の乏しさ、刺激への過敏性、ものへの慣れにくさ）との関係性が示唆されている。

木曾（2016）¹¹⁾は未診断の発達障害の傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係について、気になる子どもをもつ保護者への問題伝達の困難性は、気になる子どもの保育より心理的負担は強いと報告しており、親の内面を理解することの困難さを課題としている。

今回の調査をとおして、育児ストレスのうち親の側面で意外な項目があったとした保育士が多く、育児環境や子どもの発達特徴についてあらためて把握できたことは、親の内面の理解に少なからずつながったと考える。

2. 保育士の親支援

(1) 保育士経験年数

今回の対象者は全員療育教室経験者であった。保育士経験年数は2年目から35年目まで幅があった。このうちプレアンケートの今後の対応への記述のうち、母への直接的な対応については、経験年数にかかわらず記述があった。一方で、子どもの発達理解を含めた対応について記述しているものは17年以上の保育士であった。保育士自身の気づきとして記述しているものは3年から12年目までの保育士であった。村上²⁾は乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析より、育児を支援する保育者は母親の育児感や育児行動ばかりではなく、子どもの個性や気質などの特徴を合わせて考えながら母親をサポートしていくことが大切であると報告している²⁾。親子療育教室実施保育園ではこれまで様々な研修形態を取り入れた園内研修プログラムにより、職員間の共通理解と保育士の資質向上にむけた取り組みを継続して実施してきた¹²⁾。保護者支援に関しては、保育士の経験年数が関与することが報告されており^{13,14)}、これまでの園内研修プログラムに育児ストレス結果と保護者対応の視点を加えた内容を共有していくことが有効と考える。

(2) 育児ストレス調査の親支援への有効性

対象者の全員が親の育児ストレス調査が保護者理解および支援に有効であると回答した。ポストアンケートでは、プレアンケートの記述内容よりも親への直接的な対応をいつ、どのように実施したか、について具体的な実践内容の記述があった。また、調査をとおして、親理解や保護者支援というキーワードが多く記述に用いられていた。これまで福井市が取り組んできた親子療育教室への参加による子ども

の発達特性に応じた具体的な療育支援より、子どもへの効果、親への効果、保育園への効果について報告してきている^{5,6)}が、親の育児ストレス結果をふまえた親支援は個々の保育士にとって有効でスキルアップにつながることを示唆された。

3. 今後の課題

公立保育園で療育教室が実施されるようになって10年が経過した。療育教室のスタッフとして療育を経験した保育士は2019年度時点で58名となっている¹⁵⁾。福井市子育て支援課では、福井市内の全保育所・幼稚園に在籍する子どものうち、発達の気になる子どもの数は、2012年度8.5%、2020年度には11.7%と全体の1割をしめ、保育上支援を必要とする子どもの数は年々増加傾向にあるとしている¹⁶⁾。保育士は療育教室実施園から他園に異動となっても、発達の気になる子どもを担当する機会があり、療育教室での経験やスキルを活用し、子どものみならず親の育児ストレスに応じた支援が可能になることが望ましい。そのためには、保育士が気になる子どもをもつ保護者支援を行う際の保育士自身への支援として、育児ストレスの情報は心理的な負担の軽減の一つになると考える。ソーシャルサポートネットワークの充実に向け、公立保育園における親子療育教室で得られた親支援の取り組みはそのシステムづくりの一助となると考える。

利益相反自己申告：申告すべきものなし。

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただきました福井市公立保育園の保育士の先生方をはじめ、本研究と調査へのご理解とご協力をいただきました福井市福祉保健部子育て支援室の職員の皆様にご心より感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費JP20K13941の助成を受けて実施したものです。

引用文献

- 1) 井上和博, 柳田信彦, 深真也他: 保育園児を持つ母親の育児ストレスとその関連要因との関係. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 24: 35-42, 2014.
- 2) 村上京子, 飯野英親, 塚原正人他: 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析. 小児保健研究, 64: 425-431, 2005.
- 3) 竹田小百合, 岩立京子: ソーシャル・サポートが育児ストレスにおよぼす効果について—特定のサポート源の違いおよびサポートに対する必要性との関係から—. 東京学芸大学紀要, 50: 215-222, 1999.

- 4) 福井市福祉保健部, 福井市立啓蒙保育園: 保育所における親子療育教室中間報告書. 2014.
- 5) 竹内恵子, 橋本かほる, 玉節子他: 在籍保育園における親子療育教室の有用性について—保護者アンケートおよび保育士インタビューから—. 福井大学教育地域科学部紀要, 4: 269-286, 2014.
- 6) 竹内恵子, 武田眞由美, 橋本かほる他: 在籍保育園における親子療育教室の有用性-育児支援の立場から-. 福井大学初等研究, 1: 11-18, 2016.
- 7) PSI育児ストレスインデックス手引き2訂版. 雇用問題研究会. 2015.
- 8) 橋本かほる, 竹内恵子, 名村晶代他: 発達の気になる子どもをもつ親の育児ストレス. 京都先端科学大学健康医療学部紀要, 7: 29-36, 2022
- 9) 福井県子ども家庭課: 保育所における気になる子の現状に関する調査. 2012.
- 10) KIDS 乳幼児発達スケール発達科学教育センター. 1989.
- 11) 木曾陽子: 未診断の発達障害の傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係-バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より-. 保育学研究 54, 67-78, 2016.
- 12) 竹内恵子, 武田眞由美, 橋本かほる他: 親子療育教室保育園としての園内研修-教員の共通理解と保育士の資質向上をめざして-. 福井大学初等研究, 2: 1-8, 2017.
- 13) 飯塚美穂子: 保育所保育士による保護者支援についての一考察—保育士の経験年数に着目して—. 子ども家庭福祉学, 18: 106-117, 2018.
- 14) 中平絢子, 馬場訓子, 竹内敬子他: 事例から見る望ましい保護者支援の在り方と保育士間の連携. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 6: 21-30, 2016.
- 15) 橋本かほる: Ⅲ. 参加児のまとめ. 福井市公立保育所における親子療育教室報告. 2012年度~2018年度~7年間の親子療育教室担当保育士および教室参加児の状況~. 福井市福祉保健部子育て支援課, 福井市啓蒙保育園, 福井市西藤島保育園: 11-13, 2019.
- 16) 福井県子ども家庭課: 保育所における気になる子の現状に関する調査. 2021.